



きれいな学校 輝く笑顔 ～J(授業)A(挨拶)S(清掃)MI(身だしなみ)N(仲間)～

大久保中だより

〒338-0815 さいたま市桜区五関282

Tel 048-852-3554 Fax 048-840-1430

Mail Address : okubo-j@saitama-city.ed.jp

**野口英世の母シカの手紙より…子を想う母の気持ちは、いつの時代も変わらない
母の日は5月11日(日)、父の日は6月15日(日)です！**

校長 新井 敬二郎

部屋の整理をしていると、以前に社会科の授業で使おうと録画していたVHSテープが目にとまった。特に関口宏さんが司会をしていた「知ってるつもり?!」シリーズ(1989年～2002年日テレ系)は大好きで、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三人の天下人や明治維新の功労者西郷隆盛、坂本龍馬などは授業に余裕ができるとよく鑑賞したものです。そのVHSテープの中に「野口英世の母シカ」という作品があり、あまり著名ではないけれど、心に響く作品だったので、母の日も近い事ですのでみなさんにご紹介します。

野口シカさんの息子は誰もが知っている千円札の野口英世博士です。社会科の教科書にも登場する野口英世博士は大正時代の細菌学者で、黄熱病の研究でノーベル賞の候補に三回も挙がったほどの有名人でしたが、51歳の若さで自身も黄熱病を患って亡くなってしまいました。その母であるシカさんが生まれたのは幕末、当時ほどこの家も貧しかったが、その中でも飛びぬけてシカさんの家は貧しかった。祖父、両親が相次いで家を出てしまったため近所の子供が寺子屋に通う中、身体を壊した祖母のため、家計のためにシカさんは幼少時から子守などの丁稚奉公に従事していたので満足に文字の読み書きができなかったのです。ですからシカさんは、学問もなく字がまったく書けませんでしたが、しかし、異国にいる息子に一目会いたさに、近所の寺の住職に頼み込んで一から読み書きを教えてもらい、囲炉裏の灰に指で字を書く練習をしながら、手紙をかけるまでになりました。次の手紙を読んでみてください。50歳前後の手紙だそうです。(次ページへ)



母シカと野口英世氏

おまいの。しせ(出世)にわ。みなたまけ(驚ろき)ました。わたくしもよろこんでをりまする。
なかた(中田)のかんのんさまに。さまにねん(毎年)。よこもり(夜暮り)を。いたしました。
べん京なぼども(勉強いくらしても)。きりかない。
いばし。ほわ(烏帽子=近所の地名)には)こまりおりますか。
おまいか。きたならば。もしわけ(申し訳)かてきまよ。
はるになる。みなほかい(北海道)に。いてまいます。わたしも。こころぼそくありまする。
ドか(どうか)はやく。きてくだされ。
かねを。もろた。こたれにこきかせません。それをきかせるもみなのを(飲まれて)。しまいます。
はやくきてくだされ。はやくきてくだされはやくきてくだされ。はやくきてくだされ。いよ(一生)のたのみて。ありまする。
にし(西)さむいてわ。おかみ(拝み)。ひか(北)さむいてわおかみ。しております。きた(北)さむいてはおかみおります。
みなみ(南)たむいてわおかんておりまする。
ついたり(一日)にわしおたち(塩絶ち)をしております。る少さま(栄昌様=修験道の僧侶の名前)に。ついたりわおかんてもろておりまする。なにおわすれても。これわすれません。
さしん(写真)おみる。いただいておりまする。はやくきてくだされ。いつくるおせて(教えて)くだされ。
これのへんちちまちて(返事を待つて)をりまする。ねてもねむれせん

<訳>

お前の出世にはみんな驚きました。私も喜んでおります。

中田の観音様に毎年、夜籠りをいたしました。

勉強をいくらしてもきりがありません。

鳥帽子という村からのお金の催促には困ってしまいます。お前が戻ってきたら申し訳ができればしょう。

春になるとみんな北海道に行ってしまう。私も心細くなります。どうか早く帰ってきて下さい。

お金を送ってもらったことは誰にも聞かせません。それを聞かせると、みんな呑まれてしまいます。

早く帰って来て下さい。早く帰って来て下さい。早く帰って来て下さい。早く帰って来て下さい。一生の頼みであります。

西に向いては拝み、東に向いては拝んでおります。北に向いては拝んでおります。南に向いては拝んでおります。ついたちには塩断ちをしております。栄昌様についたちには、拝んでもらってます。

何を忘れてもこれは忘れません。写真を見ると拝んでいます。早く帰って来て下さい。

いつ帰れるか教えて下さい。この返事を待っています。寝ても眠れません。

いかがでしょうか。無学だったシカさんが、一生懸命に字を習い、異国の地にいる我が子(英世)に出した手紙、たどたどしい一字一句に、母親の切々たる思い、情愛が込められていて読むうちに胸が熱くなってきませんか。母親とは本当に有難いものです。子がいくつになっても、親は親なのです。

この話には続きがあります。この手紙が野口英世博士に届いてから三年後、大正4年にアメリカから初めて帰国することになりました。約15年ぶりのことだそうです。日本では博士の帰国に各方面から講演依頼が殺到します。その時博士はこう答えたそうです。「まことに光栄なことです。しかし、私は長い間、母親にさびしい思いをさせ続けてまいりました。そしてまた間もなくアメリカに帰らなければなりません。せめて日本にいる間だけでも、母親のそばにいてあげようと思います。そこでもしお許し下さって、母親も一緒に連れて行って差し支えなければ、講演に参りましょう。」と言って、年老いた母親の手を引いて、各地の講演旅行に出かけたそうです。東京、名古屋、伊勢をまわって大阪に

着き、箕面の料亭で歓迎会に招待された時のことです。その宴会の場には、関西でナンバーワンといわれる芸者が舞を舞って歓待しましたが、それには目もくれず、かたわらの母親に「お母さん、これは鰹(かつお)という魚のお刺身ですよ」「お母さん、松茸(まつたけ)のおつゆですよ」と箸を取って食べさせ「お母さん、お母さん」と言って、まるでからだじゅうを撫で回すようないたわり方だったそうです。舞っていた芸者は、本来であれば自分が無視された、と腹を立てるところですが、さすが一流だけあって、博士の心情を理解し、並々ではできないものではない、と、そっと涙を流したと言われています。

また、シカさんは、英世が囲炉裏に落ちて大火傷を負ったことを生涯に渡って悔い続けていたとも言われています。故に、英世が出世していくことを誰よりも悦んだといわれるが、「息子がどんな勲章を貰ったとしても自分にはそれがどのような立派なものかはわからないが、息子が向こうで元気でやっているのなら、それで良い」と息子の出世を決して自慢するようなことはなかったとも伝わっています。

毎年の事ですが、今年も母の日、父の日がやってきます。親は子を想い、子は親に感謝する、そんな日になって欲しいと思います。みなさんも、手書きで手紙を書いてみるのもいかがでしょうか。

《野口英世 名言集》

◇志を得ざれば再び此の地を踏まず。

解説: 医者になれなければ二度と故郷には帰ってこない! という強い決意から出た言葉

◇家が貧しくても、体が不自由でも、決して失望してはいけない。人の一生の幸も災いも、自分から作るもの。周りの人間も、周りの状況も、自分から作り出した影と知るべきである。

◇過去を変えることはできないし、変えようとも思わない。なぜなら人生で変えることができるのは、自分と未来だけだからだ。

◇努力だ。勉強だ。それが天才だ。だれよりも、三倍、四倍、五倍、勉強する者、それが天才だ。